(サンプル)

※体験版の為途中からとなります。

「減らず口はそこらへんにしといた方がいいぜ、状況がわかってんのか？」
乱暴に手を下ろすと、布地を一気に引き裂いた。瑞穂の白い素肌が獣達の目に晒される。
「たまんねえな……」
両肘を押さえていた男が身を乗り出し、肩越しに瑞穂の胸を覗き見た。上擦った声で、それがアロハの三下だとわかる。
「おい、しっかり抑えてろよ」
パジュが指示をして、ボトムに手を掛けた。
「放せ、馬鹿ッ……！」
志貴に触られたあと、ファスナーこそ上げたが、前ボタンとベルトのバックルを留めていなかったその場所は、パジュが生地を掴んで引っ張っただけで、簡単に腰

が露わになった。下着ごとデニムが腿まで下ろされる。
「おいおい、さっそく濡れてやがる……やっぱり感じてたんじゃねえか」
「誰が……嫌、触るなッ……」
片足ごとに履いていたものを抜き取られ、あっという間に瑞穂は全裸にされた。アスファルトの抉れた表面が、もがくたびに柔らかい皮膚を容赦なく傷つける。両脚を掴まれ、膝を胴側へ曲げるようにして、股間を広げられた。瑞穂は背中を地面に押し付けられる。パジュが顔を股間へ埋め、熱い感触が陰部に触れた。
「や、やあっ……」
「俺がヘタクソかどうか、その身体で確かめてみるんだな」
苛立ったようにそう言い捨てると、熱を持った塊が襞を押し分けて侵入する。瑞穂の言葉は、少なからず目の前の男のプライドを傷付けたらしい。
志貴が言っていた警告を思い出す……アグリア人は、メンツを何より重んじる民族だと。
クチュクチュと音を立てながら、長い舌がうねる。塊が陰唇の狭間を出入りする

たび、瑞穂はゾワリとした感覚に身を震わせた。乳房には、ニヤけた顔をした三下が、頭上から覆い被さるようにして手を伸ばしている。

別の男は瑞穂のペニスを弄んでいた。

「ん……あっ……ああ……」

ついさきほど、志貴に気をやられたせいだろうか、神経が性感と直結しやすくなっていた。

視界に茶色い木の先端が見える。瑞穂はゆっくりと手を動かすが、獣達の顔に変化はない。腰を揺らし、甘い声を口から迸らせる瑞穂の媚態に油断しているのだろうか、相変わらずその身に触れて、下卑た笑いを浮かべるだけだ。

「あんっ、あんっ、ふ……んんっあぁぁ……」

身を仰け反らせながら、瑞穂は腕を高く振りあげ、手探りで床の物を手繰り寄せた。ストックをしっかりと握りしめ、一気にアサルトライフルを振りおろす……そうしたつもりだった。

「何をしてる」

SAK-47 のバレルを握りしめた男が、冷たい目で静かに瑞穂を見おろしていた……例の煙草男だ。
「おっと……、おイタは感心しねえなあ……ソイツを貸してくれ」
瑞穂の股間から顔を上げたパジュが、煙草を咥えた男からSAK-47を受け取り、瑞穂の目前に掲げ持った。
「せっかく良くしてやろうと思ってたってのに、こんなモンに気をとられやがって……そんなにコイツが気になるか？」
「ひっ……」
銃口を顔に向けられ、瑞穂は短く悲鳴をあげる。パジュがニヤリと笑った。
「だったらご希望通りくれてやろう」
吊りあがった目を眇めながらそう言うと、再び脚を大きく広げられ、そこに固く冷たいものを押し当てられる。
「ひいっ、やめ、やめて、そんなのッ……」
抵抗するが、肩を床へ強く押さえつけられ、身体の自由は利かない。首だけを伸

ばし、眼下へ広がる信じ難い光景に、瑞穂は目を大きく見開いた。
充分に濡れていたため、意外なほどそこは痛くない。フロントサイトが襞で一旦引っ掛かっただけで、グイグイと押し込んでしまうと、みるみるバレルが胎内へ呑みこまれていく。
「うわ、すげえ……エロすぎ」
三下が身を乗り出し、アサルトライフルを咥えこむ瑞穂の陰部を食い入るように眺めた。
「こんなもん突っ込まれて平気なオンナ初めて見たぜ……ユルユルじゃねえか」
目元に傷を負っている男が、呆れたように言い放つ。正面ゲートで瑞穂と格闘した、サングラスの男のようだ。
「そうでもねえぜ。美味そうに食い付いてやがる……ほら、見ろよ。ちょっと引っ張ったぐらいじゃ、抜き取ることも出来ねえ。こんな鉄の筒突っ込まれて感じてやがる」
「んなわけ……ない……んあぁっ……やめっ……」

フロントサイトのでっぱりが、内壁に食い込み引っかかっているのだ。少々引っ張ったぐらいで、抜けないのは当然である。
パジュはストックをわしづかみ、無理矢理突っ込んだときと同じように、力づくで出し入れさせた。粘膜が掻きまわされ、引き抜かれる度に、サイトにひっかかった体液が、陰部から掻き出される。
「どんどん溢れてくるぜ……コイツやっぱり、ビッチだな」
バレルを出し入れするたびに、水音が漏れる。摩擦が熱を生み、擦りあげられた場所が徐々に熱くなっていく。
「ライフルの銃口突っ込まれて、こんだけヨガってちゃあ、弾が飛び出したら、どうなっちまうんだろうなあ」
ストックを動かしながら、パジュが顔を覗き込ませ、ニヤリと笑う。
「何、言って……」
カシャリとチャージングハンドルをスライドする音が聞こえ、既にボルトに収まっていた弾が強制排莢されて、次弾が送り込まれる。

「昇天しちまうかもな……」
獣の指がトリガーにかかった。
「ひ……ひいっ……」
瑞穂はガタガタと震えだす。
「バアン……！」
パジュが叫び、続けてダダダンと小銃を連射する音がどこかで響く。
「うわあああああああああああああッ……！」
その身を襲った解放感と、生温かい感触、そしてアンモニア臭。
「きたねえ……漏らしやがった」
嘲笑するような声と同時に、瑞穂は自分が失禁したのだと理解した。
陰部からは相変わらず SAK-47 のバレルが生えており、トリガーに指をかけたパジュは、瑞穂が放物線を描きながら放ち続ける尿をその手に浴びている。一層欲望でギラついた目はまっすぐに瑞穂へ向けられていた。パジュは銃から手を放すと、頭上へ回り込み、瑞穂の上半身を支えた。背後から腿に手をかけられ、股間を

割るようにして腰を抱えられる。臀部に固い感触を感じたと思った直後、先端で後孔を探られ、塊をグイグイと押し込められた。

「あっ…ああっ……」

弛緩して下半身が濡れていた瑞穂の身体は、少しの抵抗を試みただけで、あっけなくそれを呑みこんでしまう。それからは、獣達のいいように弄ばれた。後ろをパジュに、陰部をアサルトライフルに犯され、バラバラのリズムで揺さぶられる。

「舐めろ」

いつの間にか傍に立っていた、あの傲慢な冷たい視線の男に、いきりたったペニスを突き出された。瑞穂が顔を背けると、無理矢理頭を押さえられ、口を開かされて、奥まで剛直を突っ込まれる。全ての孔を塞がれ、嬲られ続けた。

「うおっ……いいぜ、すげえ締まる」

背後から乳房を揉みしだきながら、パジュが呻いた。初めて受け入れる後ろの孔は、ひりつき、揺さぶられるたびに断続的な痛みを脳へ伝えた。アサルトライフルのストックをわしづかんだ三下は、先端で子宮口を突きながら、魅入られたように

捲れ上がる陰唇の複雑な蠢きを凝視している。
「ふっ……」
瑞穂は軽く息を漏らし、口元を緩ませる。
もしも妊娠しているのなら、その調子で犯してくれたら、勝手に流れてくれるかもしれない……。
瑞穂が腰をくねらせ、獣のペニスを喉まで咥えたまま、誘うように目の前の男へ目を向けると、三下はゴクリと喉を鳴らした。アロハを纏う獣は取り出した自分のものを扱きながら、もう片方の手で銃を操り、力任せに膣を突いてきた。鉄の筒が子宮口を刺激し、火が付いたようにそこが傷みだす。同時に込み上げてくるどうしようもない深い快感に瑞穂は困惑した。徐々に子宮が下降して粘膜が鉄を強く締め付ける。突き刺すような痛みと強い快楽で、瑞穂が身体を震わせた瞬間、頭上で呻く獣の声が聞こえた。